

23 【ちんちろり】

夏休みが終わるころ、母親と一緒に躑躅峠（つつじとうげ）を越えた
ことがありました。

躑躅峠だけれど、もう躑躅の花はみられない。

この村恒例の、なまぬるい風が吹いていました。

日が暮れかかってきたので、ぼくは【がしゃどくろ】を踏んづけない
よう、下を向いて歩いていました。

するとうしろのほうから、

「金ちゃん金ちゃん、ちんちろり」

と誰かがいいました。

前を歩く母親にきくと、

「何も聞こえん」

と答えます。

幸か不幸か、母親は耳が遠いのです。

また同じ声がする。

「ちんちんとはなんじゃ」

と応えると、

「ちんちんではなくちんちろり」

という。

「おまえこそちんちろりじゃろ」

というと、

「金ちゃん金ちゃんちんちろり」

とまたいう。

いやだいやだとおもいながらも、

「おまえこそちんちろりじゃろ」

とまたいいました。

そうして家に着くまで、繰り返しいいつづけたものでした。

ちんちろり

ちんちろり

ちんちんちろり

ちんちろり

翌日、懐爺のところに行きました。

やはり頼りになるのは、懐爺だけでした。

「【ちんちろり】は、しつこいおばけですからね。家に着いたら小坊主がいまませんでしたか」

懐爺がききました。

「そんなもんおらん」

ぼくは答えました。

「【ちんちろり】はふつう小坊主のおばけで、その小坊主は狂言が好きなんです。あの繰り返しは狂言の真似ですね」

「きょうげんたあ、なんじゃ」

「むかしの喜劇、つまり可笑（おか）しいお芝居、学芸会でしょうか」

「がくげいかいか。【ちんちろり】はしばいしたんか」

「お芝居だから、ちっともこわくなかったでしょう」

「こわくないおばけは、おばけじゃなかろう」

「金ちゃん、おばけはもともと、こわいものではないですよ」

「こわい。【ちんちろり】だってこわい。おなじことをくりかえすおばけは、やっぱしこわいべ」

「こわいとおもうから、こわいんで。こわくないとおもえば、こわくないんです」

「こわくないとおもっても、こわいべ」

意見がわかれました。

こういうときこそ、いいやすいと子供心におもったにちがいない。

ぼくは懐爺に前からききたかったことを、ききました。

「どうしてかいじいは、おばけのこと、こんなにしつとるんかのう」

「それはですね」

懐爺は、少しも口ごもりませんでした。

「わたしはおばけの世界に、長くいたからですよ」

「かいじいは、おばけだったんか」

「おばけを退治するおばけです。おばけはおおくても、おばけ退治はすくないですから、なかなかこの世にもどしてもらえなかったんですが、十日間断食してなんとか戻ってきました」

「めしくわにゃあ、おばけにならんのか」

「そうは言ってません。ただおぼけは意地汚いですから、食べることに
関しては、豚並み。一日十食くらいやるおぼけもいます」

「うらやましいのう」

欠食児童のぼくは、本当に羨ましかったのです。